広島大学附属中・高等学校研究紀要
〈第48号　2001〉

場所的文脈を主題にした地域調査論
——「鞆のまち」を事例として——

高　田　準一郎

本稿では，地域調査における新工房的手法の有効性を，鞆のまちを事例に検討した。新工房的手法は，場所的文脈を主題にする。場所的文脈は，歴史的な意味や景観的な意味に加えて，認知的な意味からなる地域を総合的に捉える視点である。場所的文脈で捉えた鞆のまちは，鞆港における海岸線のもつ意味に焦点化される。内側彎曲型の海岸線は，エッジとして地域をひとつにまとめるという重要な意味をもつ。このような場所的文脈を捉える方法は，生活科において注目されている探検的方法に重なる部分も少なくない。初等教育と中等教育との教育課程論に向けての予察的な作業となる。感覚の主体性と地域認識のための想像力という地域調査の根源性を取り戻し，地域調査の実証性の原点ともいえる「まちを歩く」，いいかえれば「見ること」に始まる実証性プロセスを重視する意味で，新工房的手法のもつ意義を強調しておきたい。

1. 問題の所在

地域をどのように認識するのか。地域認識は，地域調査の主題と方法とに深く関わる。本稿で検討するのは，場所的文脈から地域を捉える地域調査である。場所的文脈を主題にした地域調査が，これからのまちづくりに果たす役割は大きい。しかし，場所的文脈から地域を捉える地域調査の事例は，現行地理の中等教科書には，ほとんど提示されていない。場所的文脈は，地表の事物を個別的に捉えるのではなく，相互関係や時間的変遷を含めて，その地域の特性を総合的に把握した概念である。本稿では，場所的文脈を歴史的な意味や景観的な意味に加え，認知的な意味をもつ概念として扱う。これらの意味の有効性は，瀬戸内に位置する鞆のまちを事例地域として，検証する。

私たちは，地域という場所性を自らの日常経験を通じて構築していく。歴史や人々との繋がり，町並みといった生活の堆積の記憶[1]が，場所性にはある。場所的文脈を主題にした地域調査は，このような場所性を捉える。まず，「まちを歩く」フィールドワークを援用し，鞆港の海岸線にあたる海際の場所性を捉える。鞆のまちは，鞆港における埋め立て，架橋の問題に直面している。それだけに，場所的文脈から捉えた地域の見方，考え方の有効性は，まちづくりとの関係ではっきりするにちがいない。

次いで，議論の焦点を地域調査に関わる地域認識の問題に戻す。地域の場所的文脈を捉える意味は，どこにあるのか。学びの視点から検討する。場所的文脈の問題は，生活科における学校探検の活動などとも関わってくる。その意味では，初等教育と中等教育との教育課程論への議論に向けての予察的な作業[2]となる。アニメ映画や文学作品など，さらに伝承など民俗領域との関係も議論の対象となる。

2. 事例地域，鞆のまち

2-1. 鞆のまちの概要

鞆のまち，鞆の浦は，広島県福山市に位置する。福山の市街地から芦田川沿いに旧鞆街道を車で30分ほど南下したところに，鞆のまちがある。鞆のまちには，2316世帯あり，6004人（2000年8月1日現在）が暮らしている。山が海に迫った小さな港町である。潮待ち，風待ちとして繁栄した鞆のまちは，海と深く関わってきた。潮の干満にかかわらず荷物の積み降ろしのできる雁木，船の修理場にあたる焚場，灯台の役割を果たす常夜燈，波から港を護る波止，船の出入りを監視する船番所の港湾施設などが現存している。これらはいずれも，江戸時代まで遡ることのできる港湾施設群である。

鞆のまちは，大伴旅人や遣新羅使が万葉の歌を残し，また平家ゆかりの地として知られる。中世の鞆は，港湾都市としての重要性に加え，政治や文化の拠点として発展した。近世になると，政治の拠点は福山に移ったものの，内海の要地としての重要性は変わらず，全国の回船が寄港し，商業活動で賑わった。まちには商家が軒を連ね，町人文化に華が咲い

An Examination of Regional Surveying from a Landscaping Viewpoint
—— A Study of the Town of Tomo in Fukuyama on the Inland Sea ——
Jun'ichiro TAKATA

図１：江戸時代の「鞆港の賑わい」（部分）（村井編，1976．p. 92）

図２：鞆の浦の文化財位置図（福山市鞆の浦歴史民俗資料館友の会，1998．p. 4）

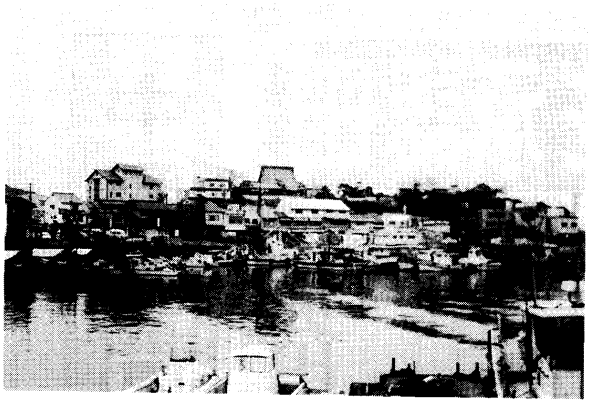

写真１：円福寺を臨む鞆港の景観（筆者撮影，2000）

写真２：雁木が残る鞆港の景観（筆者撮影，2000）

た。また，頼山陽や朝鮮通信使をはじめ，多くの文人墨客がこの鞆を訪れ，鞆の風景を絶賛している。図１は，江戸時代の「鞆港の賑わい」，図２は，鞆の浦の文化財位置図である。また，写真１は，円福寺を臨む鞆港の景観，写真２は，雁木が残る鞆港の景観である。

2-2. 鞆のまちの埋め立て・架橋計画

1983年，広島県は鞆に鞆港計画を策定した。この計画は，鞆地区道路港湾整備計画に引き継がれ，現在に至っている。この計画では，鞆港の西側２ha を埋め立てるとともに，東側には長さ 175 m の橋を架け，県道バイパスを整備する。この埋め立て，架橋計画事業は，道路整備か景観保全かで鞆のまちを二分させてきた。地域として鞆のまちの歴史的環境を評価し，保存していこうという動きは，1970年代前半に始まる。高度成長期の開発に対しての疑問が全国的に広がりつつある時期と重なる。鞆のまちの歴史的環境を見直す動きは，片桐（2000）の「港町の活性化と保存―鞆の浦を対象として―」に，詳しく紹介されている。図３は，鞆のまちの埋め立て，架橋計画の概要を伝える新聞記事である。

2-3. 鞆のまちと場所性

場所的文脈を読解する意味でモデルとなるのが，東京大学都市デザイン研究室（以下，東大デザイン研）が行った調査である。調査の方法は「まちを歩く」である。「自らの五感を頼りにまちを歩き，場所ごとのつながり，魅力，問題点，などを見つけます。それらを見つけるには，そこでのくらしと結びつく様々な切り口を用意したり，特徴的な地区ごとに個別に見てゆくという方法があります（東大デザイン研，2000，p. 2)」。調査によって「鞆のまちを読み解く鍵」として抽出されたのは，「眺望」「まちかど」「海際」「跡」「よわい美」など17項目に及ぶ。どの項目も場所性に関わる。この調査では，場所性を「場所のもつ意味（記憶・未来)，その意味が活きていること。場所のある活動（人・くらし)，その活動が活きていること。(前掲，p. 56)」をもつ言葉として捉えている。

鞆のまちは，「それぞれにある場所の人々の暮らしや活動が，その場所と細やかに関係づけられて来る中で，個々の場所に深い「場所性」が醸成されて(前掲，p. 56)」きた。「大きな自然環境，そして個々の場所の場所性が鞆のまちに奥深さを与え，まちの魅力をつくりだしている（前掲，p. 56)」。東大デザイン研は，この鞆のまちを調査した内容を『鞆雑誌』という形でまとめた。「この本は私達が鞆で見て，感じたこと，考えたことを目に見える形でみなさんに伝えるために作りました。」とあるように，メッセージ性の強い斬新な内容構成になっている[3)]。

ジェイコブスの代表的著作に『アメリカ大都市の死と生』(1961）がある。これまでの都市計画や再開発に対する一つの挑戦として書かれた。視線は，都市生活者の日常の具体的な場所に置かれていた。ジェイコブスは，ニューヨークやボストンなどの調査をもとに，大都市批判を展開し，都市計画の画一性と不毛性とを経済学的，社会学的に分析した。そして，都市における公園や街路の多様性を維持するための小街区方式を提案する。このジェイコブスの都市へのアプローチが「歩く，見る，聞く」であった。場所の経験や意味が思考の出発点である。東大デザイン研が行った「まちを歩く」は，このジェイコブスの方法と重なる部分が少なくない。

3. 場所的文脈からみた鞆港

3-1. 鞆港の歴史的な意味

市古（2001，p. 1）は，「「築港論」から整理される鞆港の特徴」を，①瀬戸内海の中央部に位置する海

図3：埋め立て，架橋計画の概要を伝える新聞記事（中国新聞朝刊，2000.2.5）

運ネットワークの要，②山地と島が囲繞する円弧型の水面，③中世に成立した中継的商業港，の3点に整理している。これらのなかで，場所的文脈に関わるのは②の内容である。円弧型の水面は，形態的には海岸線によって規定される。現在のこの海岸線は，江戸時代前期の形態をほぼ引き継いだものになっている。尾上（2000）は，瀬戸内の北前船の寄港地を中心に現地調査を行い，歴史的港湾施設をモデル化した。調査した11港のなかで「鞆の浦は唯一の円弧型モデルである（前掲，p. 6)」と指摘している。調査対象となった港湾は，高砂港と室津港，牛窓港，下津井港，鞆の浦，尾道港，竹原港，御手洗港，上関港，三田尻港，下関港である。

数多くの土木事業が日本列島の沿岸を埋め立て，水際をコンクリートの護岸で覆い隠していったのは，経済成長期だった。しかし，鞆港は，江戸時代前期

の形態をほぼ引き継いできた。長谷川（2000）は，この事実を「驚きに値する」と指摘し，「いわいる五点セット（波止場・雁木・常夜灯・焚場・船番所）がそろった港湾施設は，その規模からみても他に例がない。のみならず，古代以来一貫した要港としての歴史を有し，限られた面積にすぐれた史跡と文化財が密集する鞆の浦の価値は，何点セットであるのかわからないほどの厚みを持っている」と評価する。鞆港の歴史的遺産としての価値である[4]。

3-2. 鞆港の景観的な意味

東大デザイン研は，海岸線にあたる海際の場所を11のエリアイメージに分類している（東大デザイン研，2000，pp. 24–25）。この11の中で，円弧型の鞆港に関わるエリアイメージは，4つである。西から時計まわりに①淀姫神社周辺，②浜，③歴史的港湾，④港湾機能のエリアイメージとなる。とくに雁木や常夜灯の残る③については，「雁木や常夜灯，石垣などの近景と，港全体が背景となって創る風景が美しい。港湾都市として発展した鞆のアイデンテイティ（前掲，p. 24）」と評価を与えている。

さらに，海際の場所を考える軸として，①沿岸の都市的機能，②土地利用，③アクセス，④アクティビティ，⑥海と大地を関係付ける機能，⑦海と身体的位置関係などをあげる。⑦の分類に言及して，「雁木や浜が海と人を柔らかくつなぐ装置として機能してきたのに対して，コンクリートで固めた防潮堤では硬直的な関係になっています」（前掲，p. 25）」と指摘する。防潮堤が高いと「海とは関係を持ち得ず，ただ空だけが広がっている（前掲，p. 25）」ということになってしまう。

鞆港は，円弧型の水面をもつ彎曲型の港湾都市であった。葦原（1983，p. 53）は，彎曲型がもつ景観を2つに分類し，考察する。一つは外側に彎曲したもので「外側に彎曲したものは，進行方向に対し，視線の切線が常に水面だけに及び，自然と人工との混ざりぐあいが少ない」と指摘する。一方，内側に彎曲したものは，「それに対し，内側に彎曲したものは，視線の切線が水面と水際線とを同時にとりこみ，自然と人工の織りなす美しい景観をつくりあげる場合が多い」と指摘する。鞆港は，内側に彎曲（内側彎曲景）し，水面の波や砂浜，雁木などが織りなす美しい景観をつくりあげている。鞆港の見える景観（ランドスケープ）としての価値である。

3-3. 鞆港の認知的な意味

鞆港の海際にあたる海岸線は，エッジとして強く作用する[5]。エッジは，「海岸，鉄道線路の切通し，開発地の緑，壁など，2つの局面の間にある境界であり，連続状態を中断する線状のもののことである（リンチ，1968，p.56）」。さらに，「このようなエッジというエレメントはおそらく，パスほど支配的なものではないが，それでも多くの人々にとって組立てのための重要な要素であり，とくに，水面や壁が都市の輪郭を形づくっている場合のように，漫然とした地域をひとつにまとめる役割を果たす点で重要である（リンチ，1968，p.56）」と指摘する。リンチ（1968）の『都市のイメージ』は，機能論的次元の議論に終始してきた都市計画に対して，象徴的次元という新たな地平を切り開く試みとなった。『ビュー＝フロム＝ザ＝ロード』など初期の著作を含めて，リンチの著作は，環境心理学などの先駆的役割を果たしている。

このような場所的文脈からの検討の重要性を看過することはできない。つまり，内側彎曲型の鞆港における海岸線のもつ価値は，歴史的な意味において価値があるだけではない。「自然と人工の織りなす美しさ」というランドスケープとしての景観的な意味に加えて，認知的な意味において，地域をひとつにまとめるという重要な価値をもつ。図4は，これらの3つの意味を図式化して示した。埋め立て，架橋計画の問題は，江戸時代前期の海岸線や焚場の保存に収束させて議論するのは危険である。すでに和歌の浦の事例もある[6]。鞆のまちの歴史や人々との繋がり，町並みといった生活の堆積を記憶する場所性をもった場所的文脈の問題という捉え直しで，議論を深めたい。

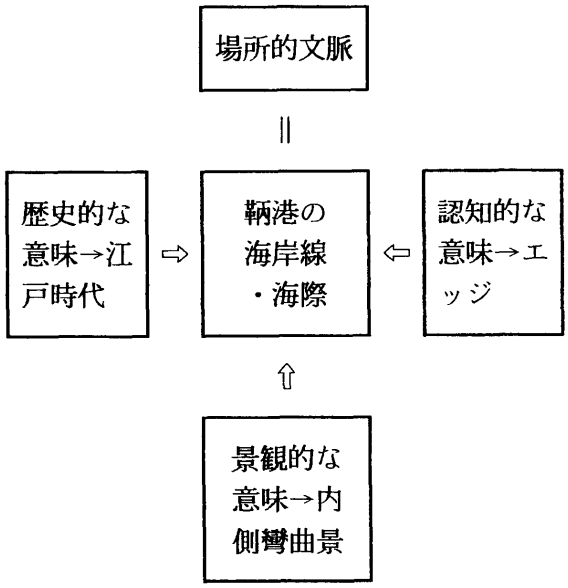

図4：景観的視点からみた鞆港のもつ意味

4. 都市計画と場所性，これからのまちづくり

4-1. ル＝コルビジェの都市計画

これまで日本列島では，数多くのニュータウンが誕生した。しかし，ニュータウンの多くは場所的文脈を否定し，あるいは断絶させて造成されてきた。都市の再開発の多くも同様だった。まちの歴史や人々との繋がり，町並みといった生活の堆積を一網打尽にして，無臭で無機質なまちをつくってきた。これまであったまちの資源を活かしながら，新しさを創出していくという方向ではなかった。この方向の原点をル＝コルビジェにみる指摘がある。確かにル＝コルビジェ（1935）は，場所的文脈を徹底的に否定し，「輝く都市」を設計した[7]。

近代的な都市計画では，土地利用を機能的に純化させる。商業地区や工業地区，住宅地区などを地理的に分離し，空間的秩序を乱すものを排除しながら，内部を均質化していこうとした。「輝く都市」にとってセーヌ川の流れは，空間的秩序を乱すものでしかなかった。このような都市観にとって，まちの歴史や人々との繋がり，町並みといった生活の堆積を記憶する場所性は，極力，排除の対象となる。

都市計画は，都市計画に関わる法制のもとで進められてきた。現行の都市計画関連法制にもとづく計画手法には，「線引き」「整備，開発または保全の方針」「都市計画マスタープラン」「地域地区制（用途地域指定）」「地区計画」「都市施設の位置決定」「市街地開発事業」「容積率規制，高度規制」などがある。計画手法の運用上，行政や一部の専門集団が進める技術的な手続きへと矮小化され，実践されてきた傾向が強い。また手続きや実践などに既得権益が絡むことも少なくない。しかし，本来都市計画は，未来に向かって，まちのあり方を問い直していく営みである。

4-2. 統計数値と都市計画

これまで地域調査として，地理の中等教科書で提示されてきた手法は，新旧の地形図や統計値の推移などの分析であった。高校地理の教科書で示された「地域調査で入手したい資料の例」では，調査地域を農業地域，水産業地域，工業地域，商業地域，観光業地域に分類する。入手したい資料の例として，たとえば，農業地域では，農林水産省統計表，農業協同組合などの資料，市町村の農政担当課の資料，国土基本図をあげている[8]。基本的には，行政担当者や研究者などの方法論と変わらない。このような捉え方が，地域調査にとって重要なのは，もちろんである。しかし，地域の生活者にとって，どのような意味をもつのかを再考したい。未来に向かって，まちのあり方を問い直していく営みとどのように接点をもつのか。

地域における産業別人口などを数量的に捉える場合を考えよう。このような統計数値は，具体的データだとよくいわれる。しかし，人口はあくまで人の諸属性であり，抽象的なデータにすぎない。つまり，「多くの人口」とか「少ない人口」とかといった表現に比べて，具体的であるだけである。形象としてイメージされるものは，欠いたままである。人口の統計値は，都市や町，村の属性を非形象的に捉え，可視化しようとする試みである。この地域調査には「まちを歩く」必要性は，どこにもない。机上でできる。都市計画との関係でいえば，機能的次元に照応する方法論と重なる。

ル＝コルビジェの都市計画にとって重要だったのは，統計数値による具体的データだった。人口や交通量といった統計数値によって，未来を予測し，それに必要な都市を定式化できるという「科学的な方法」だった。街路は交通するための機械とみなし，街区の中心には，地下に鉄道駅，屋上を空港とした立体型の交通ターミナルを配置する。このような現代都市のモデルをパリの中心部に適用した「ヴォワザン計画」では，歴史的な建物やモニュメントは，保存や移築の対象として扱われた。これまであったまちの資源を活かしながら，新しさを創出していく計画ではない。つまり，場所的文脈を生かした象徴的次元に照応する方法論ではなかった。

4-3. 場所的文脈の可能性

場所的文脈から地域を捉える地域調査は，どこまでも具体的である。生活者の日常の具体的な場所から地域を捉えようとする手法である。これまでの地域調査では，公園や街路は，数量化されたデータに還元され，たとえば，該当地区における住民の人口比に対しての数量的なものが適正化どうかが問題にされた。しかし，場所的文脈を捉える地域調査は，これまでの場所性をもとに，どのような公園や街路だったらふさわしいかなど，「まちを歩く」場所の経験や意味を強調した新たな場所性の構築に向かう。まちの公園や街路の多様性を維持するための小街区方式を思考する。

「まちを歩く」調査の方法は，「自らの五感を頼りにまちを歩き，場所ごとのつながり，魅力，問題点，などを見つけ」る方法だった。東大デザイン研（2000，p. 62）は，これからの鞆のまちづくりにおいて，次の5つを「守り・育てていくべき場所性」としてあげた。①まちなかの「通り」を再生する，②

要となる高い所を尊重する，③まちの玄関口となる場所を育てる，④「共（とも）」の空間を守り，創る，⑥海際を生かす。そして，それぞれの場所性について，具体的にどのように場所性を守り，育てていくのかの可能性を探っている。

⑥に着目して，その可能性を探ってみよう。東大デザイン研（2000，pp. 66-67）は，次の4つの方法を提案している。「方法1．海際を楽しむ仕組みをつくる，方法2．鞆港の風景を楽しむ場所をつくる（雁木～鞆港バス停），方法3．防潮堤に分断された人と海の関係を改善する，方法4．海際空間を総合的にデザインする」。方法1では，徳島市の新町川岸を参考事例としてあげ，オープンカフェや屋台村，青空市場などのパラソルショップを提案。オシャレなパラソルでもあれば，雰囲気はがらりとかわるはず。方法2では，落ち着いた石畳の広場にして，茶店をだしたり，ベンチをおく等，屋外で港を楽しむことのできる場所にすることを提案。方法3では，防潮堤に邪魔されがちな人と海との関係を改善するために，デッキの追加による再生やボードウォークの新設などを提案。方法4では，デザイン調整の場（審査制度）や専門家の一貫した関与，デザインガイドラインの設定などの必要を提案。海際の快適な場所を設計している例として，門司港レトロ事業，気仙沼「海の道」をあげている。このように，どのように場所性を守り，育てていくのかが，まちづくりの重要な論点になる。

5. 場所的文脈を主題化した地域調査

5-1. 場所的文脈に着目した実践

「社会科教育方法演習Ⅰ」では，場所的文脈を捉える地域調査のあり方を模索してきた[9]。図5は，場所的文脈を主題にした地域調査を図式化したものである。フィールドワークでは，「まちを歩く」調査で，地域の景観を場所的文脈で捉える。場所的文脈で捉えた地域の景観を，場所的景観とよぼう。このような場所的景観を写真やスケッチで記録し，適切な文章で説明を加え，レポートを作成する。フィールドワークの結果は，レポートをもとに発表し，質疑応答で，場所的文脈への理解を深める。1998年度のレポートは，「駅前と駅裏の景観―JR西条駅の場合―」「西条の中の「新しいもの」と「古いもの」」「「古きよき町」の再開発―尾道駅前再開発―」「新しい町，西条中央の特徴を探す」「散歩道にみる町の景観―竹原市忠海町―」などのテーマで様々な場所的文脈が反映されていた。

「散歩道にみる町の景観」には，「犬の散歩で毎日通る道でも，少し見方を変えれば，いろんなことに気付く。ちょっとした農家の工夫や町内会の取り組みなど，これまで気にもしなかったことばかりだった。農道からは町の大部分を眺めることができる。（中略）身近な地域をもう一度見なおしてみると，色々なことがわかる。今回の調査で，いつもは見過ごしてしまうようなことを見付けだす楽しさを味わうことが出来た」という感想だった。「少し見方を変えれば」の見方が，場所的文脈の捉え方に関わる。

この写真やスケッチを主体にした方法は，ダイレクト＝オブザベーションと重なるところがある。後藤（1996，p. 6）は，ダイレクト＝オブザベーションに言及して，「観察者が間近なところからまなざしを直接注ぎ込むことによって対象を捉えようとするところに特色を有しており，それは佐藤健二が都市社会学的な「方法としての考現学」に対して与えた，「外側から描写する」「徹底した目の方法」という規定がそのまま当てはまると言ってもよかろう」と説明している。場所的文脈を捉えるには，まずはこの

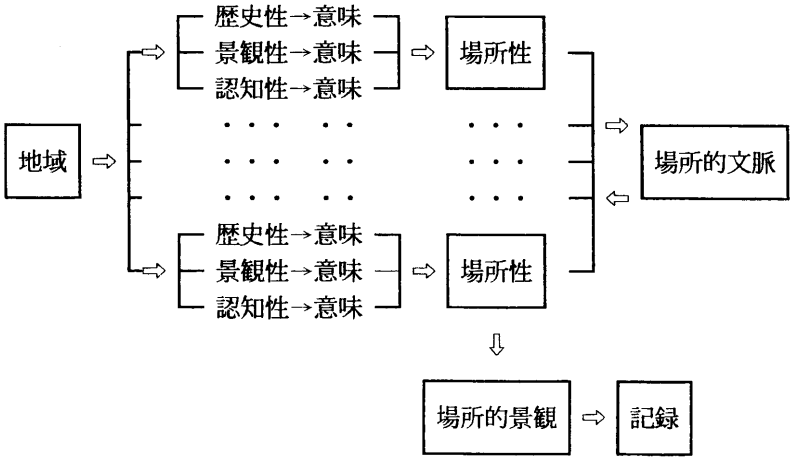

図5：場所的文脈を主題化する地域調査

ような写真やスケッチを主体とした方法が有効である。

後藤（1996，p.6）の実践は，「「写真で語る：『東京』の社会学」というレポート課題において，「東京」や「東京人」（より一般化して言えば，現代都市／現代社会や都会人／現代人にまで広がり得る）を象徴的に表すと各人が考える場面を1枚の写真におさめて，適切なタイトルを掲げると共に，社会学的な言説で短い（400字程度の）解説を加える」というものである。「1994年度は約200点，95年度は約270点のレポートが提出されたが，それ自体が「東京」における多元的なリアリティが刻印された質的データ群を構成し，「東京」の社会学的研究の恰好の素材となる得る」と評価している。

5-2. 新工房的手法としての地域調査

地域調査を「場所性（象徴性）対空間性（機能性）」軸と「都市計画（行政主体）対まちづくり（住民主体）」軸を直交させて区分してみよう。この関係を図6に提示した。これまでの統計数値主体の地域調査は，「空間性」に適応した「都市計画」に照応する方法だった。図6の左下に該当する。それに対して，場所的文脈から地域を捉える「まちを歩く」は，「場所性」に根ざした「まちづくり」に照応する。図6の右上に該当する。もちろん，2軸を直交させた4分割のカテゴリーで捉えられるほど単純ではない。1つのモデルとしての図式化である。

図7は，21世紀の「ものつくり領域」の図式化である。この図式化は，「産業デザインシンポジウム」で，久保博尚（2001）が提示したものである。「大量生産対カスタムメイド」軸と「デジタル対アナログ」軸を直交させて区分する。かつての日本の工業は，図7の左下が主流だった。現在は，中国をはじめアジア諸国が担い，すでにデジタル化に向かっている。日本の工業はデジタル化にシフトしたが，すでにアジア諸国に追われつつある。図7の右下は，職人技に代表される工芸的分野である。このような関係でみたとき，21世紀の「ものつくり領域」での可能性は，図7の右上のシフトにある。この右上への付加価値に向かうシフトを新工房生産とよぼう。工業からみれば工業の工芸化，工芸からみれば工芸の工業化の方向である。以上が久保による図7に関しての趣旨であった。

この関係をそのまま図6に重ね合わせてみる。本稿では，図7にあやかって，場所的文脈を捉える「まちを歩く」調査を新工房的手法とよぼう。場所性に根ざしたまちづくりに照応する地域調査を表現する。新工房的手法は，これまでの地域調査では捉え

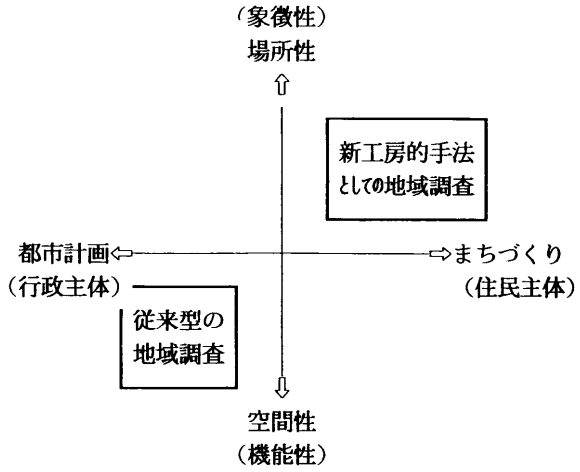

図6：「地域調査領域」の図式化

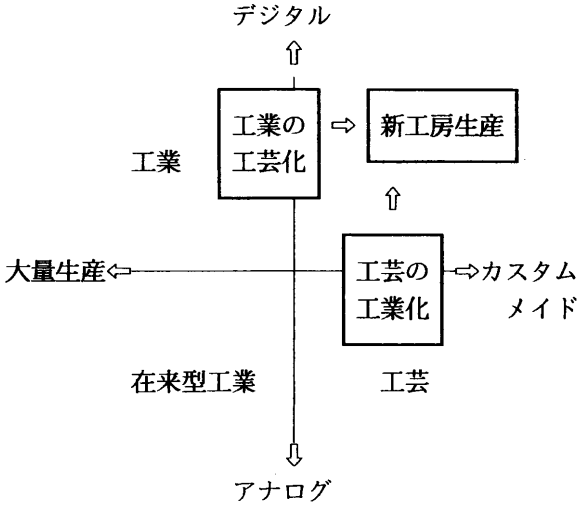

図7：「ものつくり領域」の図式化

切れなかった諸事象の背後に見え隠れする場所性を可視化し，場所的文脈を主題にする。この手法は，象徴的次元で地域を読解しようという試みである。

5-3. 場所的文脈からみたまちづくり

これからのまちづくりは，場所的文脈の読解が重要な主題となる。場所的景観は，まちの魅力の根源に関わる。町の落ち着いた佇まいや路地からふとのぞく海の色，海際の深みを演出する彎曲景の海岸線など人々が培ってきた魅力ある場所性。このような場所的景観は，まちづくりの基本となるものだといってよい。ふだん眺めている場所的景観が，いかにていねいにつくられ，守られてきたのか。そして，それがいかに貴重で繊細なものなのか（東京デザイン研，2000，p. 15）。

20世紀は，大量規格型に象徴される産業社会の発展の時代だった。自然や資源を急速に富に転化し，

膨大な消費を拡大した世紀であった。場所的文脈も空間に還元され，まちやむらの様式も大きく変容した[10]。しかし，21世紀は，20世紀の延長上で想定できる世界ではない。新しいあり方が模索されなければならない。場所的文脈を読解し，場所的景観に価値を発見する新工房的手法は，この意味で，新たなまちづくりを切り拓く可能性をもった方法論である。

6. 学びの視点からみた地域調査

本稿では，鞆のまちを事例に，この新工房的手法の有効性を東京デザイン研の手法を援用し，検討してきた。新工房的手法は，場所的文脈を主題にする。これまでの地域調査では捉え切れなかった場所的景観の価値を問題にする。それだけに，まちづくりとの関係で，場所的文脈からの議論をさらに深めたい。新工房的手法は，場所的文脈の技術的な運用方法など，教材の開発に関わる検討は，これからの課題である。しかし，ここでは，場所的景観の価値を捉え，象徴的次元を切り拓く方法論としての重要性を，強調しておきたい。

場所的文脈を主題にする地域調査は，探検的方法に重なる部分も少なくない。探検的方法は，生活科において注目されている学習活動である[11]。学校探検の計画と実践など初等教育との関係ではどうなのか。発達段階における検討が重要な意味をもつ。「まちを歩く」，いいかえれば「見ること」に始まる実証プロセスを重視する新工房的手法では，さらに，記憶とか思い出を重ね合わせて，環境を知覚する意味を重視する。宮崎監督（1998）の『となりのトトロ』に代表されるアニメ映画や文学作品『赤毛のアン』などの検討も，その意味では重要な領域になる。

場所的文脈は，歴史的な意味や景観的な意味に加えて，認知的な意味からなる地域を総合的に捉える視点である。この視点は，日常の認知の方向を質的に転換する契機を含む。感覚の主体性と地域認識のための想像力という地域調査の根源性を取り戻し，地域調査の実証性の原点（後藤，1994，p. 8）ともいえる「まちを歩く」，いいかえれば「見ること」に始まる実証プロセスを重視する意味で，新工房的手法のもつ意義は大きい。感覚の主体性と地域認識のための想像力は，学びの視点から検討に値する問題である。

付記

本稿は，平成12年度山口地理学会（2000）において発表した「港湾都市「鞆の浦」の景観構成」の内容を骨子とした。

注

1) 「景観の問題には，私的所有権の見直しをも迫る広がりがあるように思われる」と指摘するのは，松原（1998）である。「たとえば街並みを構成する自宅の外観についても意のままに処分するならば，街並みの記憶によって構成される「わたし」の同一性や身体感覚は剥離した状態に置かれるだろうと筆者は考える」と，心理的な問題に言及する。

2) 『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説―社会編―』（1999，p. 30）には，「例えば，景観の観察といった視覚的にとらえる活動を取り入れるなど，……」と景観に着目した地理学習を工夫し，主体的な学習を促すことが必要との指摘がある。

3) 「鞆における活動報告」では，「みなさんにお伝えしたいこと」として，「1.「大切なもの」はくらしの中で守り育てられてきた。2.「大切なもの」を活かしたまちづくりのビジョンが今，必要とされている。3. ビジョンの実現のために，検討に値する様々な方法がある。」の3点をあげる。

4) 長谷川（2000）は，「海に面した都市＝港湾都市は，歴史や文明そのものを体現する場である。とりわけ，周りを海に囲まれた日本列島にあっては，「顔」であり「窓」であり「発動機」であった。ところが，日本列島の港湾都市が具体的にどのような姿をしていたのか，今となってはほとんど知る術がないのである」と指摘する。それだけに，鞆港の歴史的遺産としての重要性を強調しておきたい。

5) どんな都市にも，パブリックイメージが存在する。市民たち，個人のイメージが重なりあった結果としてのイメージである。リンチは，このパブリックイメージを，5つのエレメントに分類した。5つのエレメントとは，パス（path，道路），エッジ（edge，縁），ディストリクト（district，地域），ノード（node，接合点，集中点），そしてランドマーク（landmark，目印）である。本稿では，これらの5つのエレメントを地域における場所的文脈の指標として援用する。

6) 和歌山県の和歌の浦は，干潮時には，干潟が現れる景勝地で，鞆の浦と同じ万葉の故地として知られる。江戸時代の末期（1851年）に，紀州の徳川家が造ったのが「不老橋」である。この石造りの太鼓橋から10 m河口側に，新しい橋として県道橋「あしべ橋」が架かった。しかし，この橋によって，「不老橋」とともにあった和歌の浦の景観は，失われてしまった。

7) この計画は，当初「300万人の都市」として発表（1922年）され，この「輝く都市」に引き継がれた。

8) 二宮書店編（2000，p. 36）では，この「地域調査で入手したい資料の例」のほか，「地域調査の手順」など，具体的な説明があり，わかりやすい構成をとっている。

9) 筆者担当の演習で，大学4年生が対象である。地域調査のほか，教育実習に関わる演習を含めて実施している。

10) 中野孝次（1998，p. 166）は，「数年前わたしは初めて筑後川の中流域，日田から浮羽郡の辺に遊んで，そこ

にはまだ昔ながらの日本の農村風景が残っているのに感銘を受けた。」と筑後川に言及し，「といってそれはなにも特別の風景ではない。つい五，六十年前までは日本中のいたるところに見られた農村風景である。なのにそれがいまひどく新鮮なものに映じ，日本の原風景を見る思いを起こさせたのは，それがもう日本中のどこでも，あらかた失われてしまっているからであった。」と指摘する。

11) 生活科の探検的方法に関しては，寺本（1995），伊藤（2000）などの論考に言及がある。

文献およびレジュメ

葦原義信（1983）：『続・街並みの美学』岩波書店，265 p.

市古太郎（2001）：土木遺産としての鞆の浦―鞆の浦歴史的港湾施設群「雁木」「焚場」調査報告．第3回鞆の浦シンポジウム資料「鞆の浦の遺産と重伝建のまちづくりを考える」鞆の浦シンポジウム実行委員会，6 p.

伊藤裕康（2000）：原体験・原風景づくりをしよう！―場所への愛着をはかる生活科の学習―；「ドラえもん」∩「となりのトトロ」＝場所への愛着⇒原風景―現象学的地理学を踏まえて―．『もう一つの地理―総合的な学習登場下の社会科教室―』（共著者，高田準一郎）溪水社，pp. 1–8; pp. 149–157.

尾上恵司（2000）：瀬戸内の北前船寄港地に残る雁木（階段）護岸の土木遺産価値―鞆の浦と他寄港地の比較をとおして―．第1回鞆の浦シンポジウム資料「失われゆく港湾都市の原像―鞆の浦の歴史的価値をめぐって―」芸備地方史研究会，5 p.

片桐新自（2000）：港町の活性化と保存―鞆の浦を対象として―．『歴史的環境の社会学』（編者，片桐新自）新曜社，pp. 80–105.

久保博尚（2001）：デジタル工房時代の立体デザイン手法とニュービジネスへの応用例（口頭発表）．「デザインワークのデジタル化」，産業デザインシンポジウム in ひろしま2001，産業デザインシンポジウム実行委員会．

後藤範章（1996）：マルチメソッドとダイレクト・オブザベーション．―リアリティへの感応力―．特集：都市社会調査のデータと方法，日本都市社会学会年報，no. 14，日本都市社会学会，A4判 10 p.

髙田準一郎（1996）：尾道の景観構成における一試論―尾道水道を事例として―．エリア山口，vol. 25，山口地理学会，pp. 11–22.

髙田準一郎（2000）：鞆港の架橋計画案．『もう一つの地理―総合的な学習登場下の社会科教室―』（共著者，伊藤裕康）溪水社，pp. 174–180.

髙田準一郎（2001）：「景観的視点」を導入した地域調査論―「層の理論」を援用して―．社会系教科教育学研究，vol. 13，社会系教科教育学会．pp. 117–125

中国新聞朝刊（2000.2.05）：鞆架橋計画案を承認．中国新聞社

中国新聞夕刊（1996.3.23）：和歌の浦の教訓．揺らぐ鞆の浦4．中国新聞社

寺本　潔（1995）：小学校における児童の地理的空間認識の育成と評価．地理科学，vol. 50，no. 3，地理科学学会，pp. 172–177.

東京大学都市デザイン研究室有志編（2000）：『鞆雑誌―まちづくりってなんだろう？』東京大学都市デザイン研究室，72 p.

東京大学都市デザイン研究室有志編（2001）：鞆における活動報告2000年度，第3回鞆の浦シンポジウム資料「鞆の浦の遺産と重伝建のまちづくりを考える」鞆の浦シンポジウム実行委員会．8 p.

中野孝次（1998）：いまこそ山河に償いを．中央公論，vol. 113，no. 7，(no. 1368)，pp. 166–176.

二宮書店編（2000）：『基本地理A』二宮書店，163 p.

長谷川博史（2000）：鞆の浦の価値と可能性．中国論壇，中国新聞朝刊（2000.2.19），中国新聞社．

服部圭郎（2001）：本源的な人間の再生こそが都市計画が抱えている課題である―オギュスタン・ベルク氏の取材を終えて―．『ビオシティ』no. 20，ビオシティ，p. 88.

馬場俊介監修，岡田憲久ほか（1998）：『景観と意匠の歴史的展開―土木構造物・都市・ランドスケープ―』信山社サイテック，357 p.

福山市鞆の浦歴史民俗資料館（2001）：福山市鞆の浦歴史民俗資料館パンフレット，A4判

前中久行（1997）：生活をとおしてみた景観変化の把握．『景観システムの基礎的解析法の開発と標準化．文部省科学研究費補助金基礎研究（A）研究成果報告書』（研究代表，中越信和）pp. 16–17.

町村敬志・西澤晃彦（2000）：『都市の社会学社会がかたちをあらわすとき』有斐閣，366 p.

松原隆一郎（1998）：景観の荒廃．ウォッチ論潮，朝日新聞朝刊（1998.5.27），朝日新聞社．

村井康彦編（1976）：鞆港の賑わい；鞆町絵図．『江戸時代図誌第20巻山陽道』筑摩書房，pp. 92–93.

文部省（1999）：『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説―社会―』大阪書籍，205 p.

リンチ，K（丹下健三，富田玲子訳）（1968）：『都市のイメージ』岩波書店，276 p.

和田文雄（2001）：高等学校地理における「地域調査」指導法の改善―教師による「地域調査」を用いた事前指導をてがかりとして―．中等教育研究紀要，vol. 41，広島大学附属福山中高等学校，pp. 71–76.